

身近な緊急事態への対応と個人特性との関係*¹

Relationship between individual traits and responses to everyday emergencies

松井 裕子 (Yuko Matsui)*²

要約 緊急事態への反応や対処の仕方には個人差があるとされる。組織やチームでの緊急時対応のための教育・訓練やチームのメンバー間の支援のあり方を考えるために、個人差の規定因を明らかにすることは重要である。本研究では、比較的経験する機会が多い日常的な場面での緊急事態への対応経験を質問紙によって収集し、対応時の反応や対応の結果と個人特性との関係を検討した。その結果、メタ認知の2つの下位尺度と自己効力感(困難への挑戦)が対応時の情動的反応の強さと対応の結果に共通して有意な相関を示した。これらの要因は、緊急事態への遭遇から対処の過程において広く影響を及ぼしている可能性がある。

キーワード 緊急時対応, 個人特性, メタ認知

Abstract There are individual differences in the responses to emergencies and how to deal with them. It is important to clarify the determinants of individual differences in order to consider education and training for emergency response in organizations and teams, as well as how to provide support among team members. In this study, we used a questionnaire to collect information on the experiences of responding to emergencies in everyday situations, which are relatively common, and examined the relationships between individual characteristics and the emotional reactions and outcomes of the responses. We found metacognition and self-efficacy(challenging difficulties) showed significant correlations with both the strength of the emotional reactions and the outcomes of the responses. These factors may have a widespread influence on the process of coping with an emergency situation from the time of encounter.

Keywords emergency response, individual characteristics, metacognition

1. はじめに

緊急事態における人間特性については、航空機パイロット(黒田, 1986)や鉄道運転士(小木他, 1968)の緊急時の対応や災害時の避難行動(たとえば横山他, 1992; 釘原・三隅, 1984)を対象とした研究をはじめ、多くの研究が行われている。個人の反応や行動を対象とした研究では、緊急時には入力段階、情報処理段階、出力段階のそれぞれで行動パターンが変化すること(黒田, 1986)や緊急事態では危険回避行動や活動停止、無関心と抑圧、依存性、攻撃的傾向といった情緒的行動のパターンが見られること(Janis, 1954; 安倍, 1988)などが指摘されている。また池田(1986)は日常および緊急事態の情報処理過程をモデル化し、状況を判断し予期を

構成するプロセス、その判断に基づき自分の外的環境あるいは内的状態に対する対応(それぞれ外的対応、内的対応)を判断するプロセス、実際の反応の3つのプロセスで構成されたとした。加えて、現状の認知や予期に関する認知をモニターし、モニタリングの情報に基づいて注意容量・範囲や時間などの資源を効率的に配分する制御機構がメタ認知的に機能しているとした。そして、緊急時には、平常時に比べ制御機構の影響が大きくなるとしている。

このような緊急時における様々な変化には、一般的な傾向性が見出される一方で、個人差の存在も指摘されている。黒田(1986)は緊急時行動パターンの変化は、ストレスの強度、環境条件に加え、個人特性の影響を受けると指摘している。また横山他(1992)は性格特性が模擬的な火災における避難行

*1 本研究の一部は日本心理学会第81回大会で発表したデータ(松井, 2017)を再分析したものである。

*2 (株)原子力安全システム研究所 社会システム研究所

動のパターンの一部を予測することを示した。

大規模な事故や災害の発生時には、多くの人が緊急時対応を行うことになるが、特にチームや組織として効果的に緊急事態に対応するためには、緊急事態への対応の個人差を把握し、個人差に影響を与える要因を明らかにする必要があると考える。そのうえで、各職員が自分自身の特徴を知り、学習や訓練で向上できる要素は向上させ、向上の難しい要素は組織やチーム内で補いあうことが重要と思われる。

本研究では、緊急事態への対処事例の収集と緊急事態の情報処理過程に関連すると考えられる複数の個人特性の測定をあわせて行うことによって、緊急事態への反応や対処の成否に影響を及ぼす個人特性を明らかにすることを目的とする。そのために、大規模プラントの事故や災害に比べて遭遇する機会が比較的多い日常場面での緊急事態に着目することとした。緊急事態の特徴は「事態の重大性」と「時間の切迫感」であるとする池田（1986）に倣い、本研究では「緊急事態」を「そのままにしておく重大な身体的・物理的・社会的被害あるいは影響を生じ、ある程度以上の時間的切迫がある事態」と定義する。

2. 緊急事態と個人特性

前述の緊急事態の情報処理過程を参考にし、緊急事態での対応に関係すると考えられる個人特性について検討した。

2.1 曖昧性耐性

特に緊急事態の初期においては、状況の把握や予期の産出に必要な、状況を理解するためのスクリプト^{*3}の欠如（池田，1986）や情報不足によって、不確定で曖昧な状態になりやすいと予想される。このような曖昧さに対する体系的で安定した個人の傾向は「曖昧性耐性」（Budner, 1962）や「曖昧さへの態度」（西村，2007）^{*4}と呼ばれる。西村（2007）は曖昧さへの態度が5因子構造であることを示した。すなわち、①曖昧さを排除し白黒をつけたい（排除）、②曖昧さを否定的に評価し知的に対処しようとする（統制）、③曖昧さをそのまま受け入れられる（受容）、④曖昧さに情緒的混乱と対処の難し

さを感じる（不安）、⑤曖昧さに魅力を感じ、積極的にかかわることを楽しむ（享受）。排除や統制、不安のように曖昧さに対して否定的な態度が強いと、曖昧さを解消するために事態を単純化したり拙速に状況認識を確定しようとする傾向が強まると推測される。一方で、普段から曖昧さを肯定的にとらえ積極的にかかわっていると、緊急事態で曖昧さの高い状況になっても、影響をうけにくくなると思われる。

2.2 自己効力感

対応の判断にあたっては、資源不足などによって実行可能な行動が制限され、外的対応が困難になりやすいと推測される。そのような状況では、無力感を感じて対応をあきらめたり、内的対応に偏ることが起こり得ると考えられる。ある結果を生み出すために自分自身が必要な行動をうまく遂行できると確信できなければ、選択肢は狭まるとされる（池田，1986）。個人がある状況に必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知を自己効力感という（Bandura, 1977；成田他，1995）。自己効力感には、当面の特定の行動に影響を及ぼすものと、より一般的な傾向性として長期的に影響を与えるものの二水準があるとされる（Bandura, 1977；坂野・東條，1986；成田他，1995）。本研究では個人差に焦点を当てるため、特定の場面での自己効力感ではなく、個人の一般的な傾向性である「特性的自己効力感」（成田他，1995）に着目する。普段から自己効力感の高い人は、緊急事態においても自己効力感の低い人に比べて多くの選択肢を用意することができ、外的対応も実行できる可能性が高まると考えられる。また、自己効力感が低い人は不安や恐怖反応が強く生じやすいとされ（Bandura, et al., 1982）、緊急事態において強い情動反応の影響を受けやすくなると予想される。

2.3 セルフコントロール

困難な課題に直面したとき、ストレスをうまく処理して課題に向き合えるように自分をコントロールする人もいるであろう。このように自発的に自己

*3 定型的な行為の系列で構成される日常的な行動や出来事に関する構造化された知識(Schank & Abelson, 1977)のこと。

*4 「曖昧性耐性」は、曖昧さを「脅威の源」(Budner,1962)と見なし、曖昧さに対する否定的な態度に焦点を当てた用語とされる(西村, 2007)。「曖昧さへの態度」は、曖昧さに対する肯定的な態度も含んだ多次元構造であること(西村, 2007)を前提とした用語である。

を統制することを「セルフコントロール」と呼ぶ(Thoresen & Mahoney, 1974 上里監訳, 1978 引用は杉若, 1995による)。杉若(1995)は、セルフコントロールには、ストレス場面における情緒的・認知的反応の制御である調整型セルフコントロールと、自分の行動方略を自発的な問題設定に基づき望ましい方向へ変容させる改良型セルフコントロールの2つがあることを示した。加えて、セルフコントロールを行わず、他者に依存したり、自発的に行動しないとといった消極的な対処方略も存在することを示している。調整型は情動や認知の制御という点で前述の内的対応に、改良型は課題へのアプローチ方法を変えると外対応と共通すると考えられる。緊急事態にもよく対応できる人は、消極的な対処方略を採用せず、調整型と改良型のセルフコントロールによって、ストレスに対処しながら事態に対処していくと考えられる。

2.4 認知的熟慮性－衝動性

時間的に切迫した状況では情報処理資源も制限を受けるため、深く考えない傾向が強くなったり(上田他, 2013)、ヒューリスティクスなどの定型的な認知的枠組みへの依存度が高まりやすいと考えられる。曖昧な状況も同様の傾向を強めると考えられる。判断にあたってより多くの情報を収集し慎重に結論をくだすか、ある程度の情報で早急に結論を出すかの違いを表す特性に「認知的熟慮性－衝動性」がある(岩男, 2001)。熟慮的な人は判断課題や広告の選好性において多様な情報への接触傾向が強いことが示されている(岩男, 2001)。緊急事態においても、認知的熟慮性が高い人は衝動性の高い人に比べて多様な情報から意思決定を行う傾向があると予想される。

2.5 メタ認知

最後に、緊急事態にその役割が大きくなるとされるメタ認知的な制御機構(池田, 1986)である。メタ認知は、自らの認知過程をひとつ高い次元から知覚、記憶、学習、思考することであり(阿部・井田, 2010)、自分や他者に固有の認知傾向や方略の有効性に関する知識などの知識的側面と、認知プロセスや状態のモニタリングやコントロールを行う活動的側面の大きく二つに分けられる(三宮, 1995)。

モニタリングでは、課題遂行中から終了後までの自分の認知活動を振り返り、チェックと評価を通じて省察し、コントロールでは、目標の認知的達成に向けて設定した計画や手法等を実行しながら適宜修正しようと認知活動を制御するとされる(阿部・井田, 2010)。緊急時の情報処理プロセスでは、状況の認識や予期に関する認知をモニターし、自身の情報処理資源をより効率よく配分しようとするメタ認知的な機構が主要な役割を担うと考えられており(池田, 1986)、本研究ではメタ認知的活動の側面に焦点を当てる。メタ認知がよく機能している人は、緊急事態においても状況を再定義し資源配分を修正することによって、継続的に事態に対処していくことができると考えられる。

3. 方法

3.1 概要

(株)三菱総合研究所の生活者市場予測システム mif (Market Intelligence & Forecast) による web 調査を行った。調査対象者は mif の登録者のうち、製造・工事関連の職業に携わる男性 200 名であった。調査期間は 2016 年 2 月 10 日～12 日とした。

3.2 調査項目

3.2.1 緊急事態への対処経験に関する項目

まず、回答者に対して、緊急事態を「生命・健康・財産などに危険が差し迫っている事態や思いがけない事態」と定義し、複数の例を示した上で、緊急事態に遭遇した経験を尋ねた。具体的には、遭遇した緊急事態について、発生した事態の内容と見通し、対処行動、その対処行動を行った理由について、自由記述での回答を求めた(3項目)。

次に、記述した事態について、対処できる自信の程度、事態発生から対処までの冷静さ、時間に対する焦りの程度、被害程度の予測(生命、健康、財産、社会的信用、その他)、および対処の結果の成否について、それぞれ5段階尺度での評定を求めた(14項目)。

あわせて、類似経験の有無、事前の予測・準備の有無等についても回答を求めた(5項目)。

3.2.2 個人特性に関する項目

緊急事態への対応に影響すると考えられる個人特性として、曖昧性耐性、自己効力感、セルフコントロール、認知的熟慮性、メタ認知に関する自己評価を求めた（113項目）。

曖昧性耐性に関する項目は、「曖昧さへの態度尺度」（西村，2007）の全26項目（下位尺度「曖昧さの享受」「曖昧さへの不安」「曖昧さの受容」「曖昧さの統制」「曖昧さの排除」）を用いた。自己効力感に関する項目は「特性的自己効力感尺度」（成田他，1995）の全23項目を用いた。セルフコントロールに関する項目は“Regressive- Reformative Self-Control Scale”（杉若，1995）の全20項目（下位尺度「調整型」「改良型」「外的要因」）を用いた。認知的熟慮性に関する項目は「認知的熟慮性-衝動性尺度」（滝間・坂元，1991）の全10項目を用いた。メタ認知に関する項目は、「成人用メタ認知尺度」（阿部・井田，2010）の下位尺度のうち「コントロール」9項目と、「モニタリング」尺度のうち10項目を有職者向けに表現を改めたものを用いた。回答はすべて「あてはまる」から「全くあてはまらない」の5段階評定とした。

あわせて、年齢、性別、職業、および緊急時の情報処理の初期的な制約条件の一つとされる体力（池田，1986）と運動習慣についても回答を求めた。

4. 結果

4.1 緊急事態の記述内容

200名のうち157名から157件の事例が得られた。そのうち、記述内容から、回答者が事態に主体的

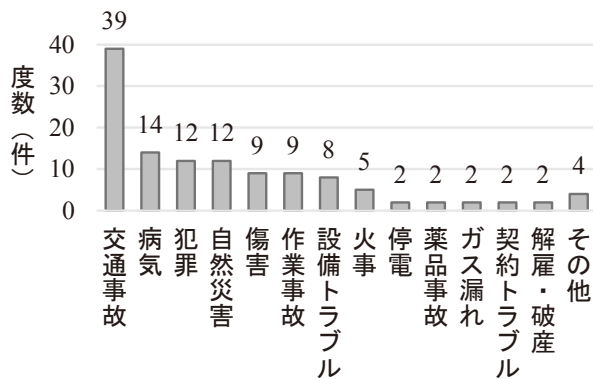


図1 記述された事例の内容

に対処していない事例および被害の程度や時間の制約が著しく低いと判断された事例を除く122件の事例を分析対象とした。122件の回答者の年齢分布は、10代0名、20代12名、30代33名、40代51名、50代24名、60代以上2名であった。記述された事例の内容を分類したところ、14カテゴリーに分類された（図1）。交通事故（39件）、病気（14件）、犯罪（12件）、自然災害（12件）、傷害（9件）、作業事故（9件）が多く記述された。

また遭遇した事態に対して、時間についての焦りを感じた程度、および生命、健康、財産、社会的信用に対する危険性を感じた程度をそれぞれ5段階評定した結果を図2に示す。「全く感じなかった」を1点、「強く感じた」を5点とした平均値は、それぞれ3.5 (SD=1.19), 2.7 (SD=1.36), 3.0 (SD=1.43), 2.6 (SD=1.42), 2.3 (SD=1.26) であった。

4.2 個人特性得点の算出

各回答者について、各尺度の下位尺度ごとに平均得点を算出した。得点化にあたっては、各尺度名の示す特性に一致する回答が5点、一致しない回答が1点となるようにした。

特性的自己効力感尺度のみ、他の尺度に比べて多い項目数で一因子構造となっていたため、次元分解を試みた。スクリープロットから3因子が適当と判断し、因子数を指定して最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、以下の3つの因子が抽出された（付表、累積寄与率48.1%）。第一因子は、困難な状況を回避したりすぐにあきらめたりすることを示す項目を多く含んでおり、「困難の回避」と命名した（10項目、 $\alpha=0.878$ ）。第二因子は、対人場面に困難を感じたり消極的になる傾向を

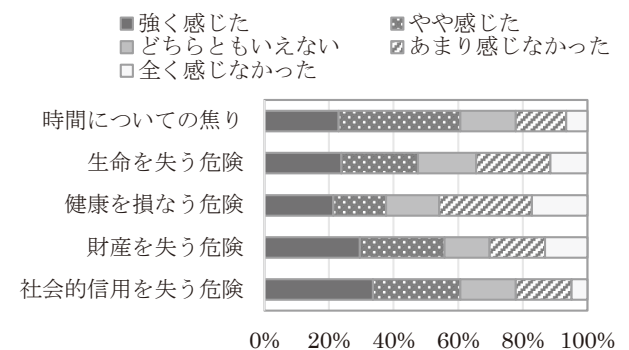


図2 緊急事態への焦りおよび危険性の認知

表す項目が中心となったため、「対人関係への態度」と命名した（6項目、 $\alpha=.311$ ）。第三因子は、困難な状況でも積極的に取り組む傾向を表す項目を多く含んでおり、「困難への挑戦」と命名した（7項目、 $\alpha=.755$ ）。この結果に基づき、特性的自己効力感尺度については、3因子それぞれの平均得点を算出した。

4.3 対処時の反応と個人特性

本研究では、緊急事態に対応する際の反応および対処の結果と個人特性との関係について分析した。

4.3.1 対処時の反応

事態発生から対処までの冷静さについて6つの選択肢から回答を求めた。結果として、「①終始、呆然として何も考えられなかった」6名、「②何かしなければと思ったが、終始、焦りや不安で考えがまとまらなかった」16名、「③最初は呆然として何も考えられなかった。途中から、何かしなければと思ったが、焦りや不安で考えがまとまらなかった」8名、「④最初は呆然として何も考えられなかったが、途中から冷静になれた」33名、「⑤最初は焦りや不安などで考えがまとまらなかったが、途中から冷静になれた」27名、「⑥終始、冷静であった」32名となった。

4.3.2 対処時の反応と個人特性

事態発生から対処までの冷静さの選択肢のうち、事態の初めから終わりまで落ち着いた対応ができなかった①②③を「終始呆然・混乱」群（ $n=30$ ）、途中から冷静になった④⑤を「途中から冷静」群（ $n=60$ ）、初めから終わりまで冷静だった⑥を「終始冷静」群（ $n=32$ ）とし、3群間で各個人特性尺度の平均評定値を比較した（図3）。

一元配置分散分析の結果、メタ認知（モニタリング、コントロール）、曖昧さへの態度（享受）、セルフコントロール（改良型、外的要因）、自己効力感（困難の回避、困難への挑戦）において、3群間に有意差が認められた（順に、 $F(2,119)=5.008$, $p<.01$, $\eta^2=.078$; $F(2,119)=5.228$, $p<.01$, $\eta^2=.081$; $F(2,119)=3.182$, $p<.05$, $\eta^2=.051$; $F(2,119)=3.105$, $p<.05$, $\eta^2=.050$; $F(2,119)=11.835$, $p<.001$, $\eta^2=.166$; $F(2,119)=7.101$, $p<.001$, $\eta^2=.107$; $F(2,119)=6.352$, $p<.01$, $\eta^2=.096$ ）。下位検定の結果、いずれの項目についても「終始冷静」は「途中から冷静」との間に有意差が認められ（曖昧さへの態度（享受）・セルフコントロール（改良型） $p<.05$ ；その他は $p<.01$ ）、加えて、セルフコントロール（外的要因）、自己効力感（困難の回避、困難への挑戦）では「終始混乱・呆然」との間にも有意差が認められた（順に、 $p<.001$, $p<.01$, $p<.01$ ）。また、認知的熟慮性について3群間に傾向差が認められた（ $F(2,119)=2.959$, $p<.1$, $\eta^2=.047$ ）。

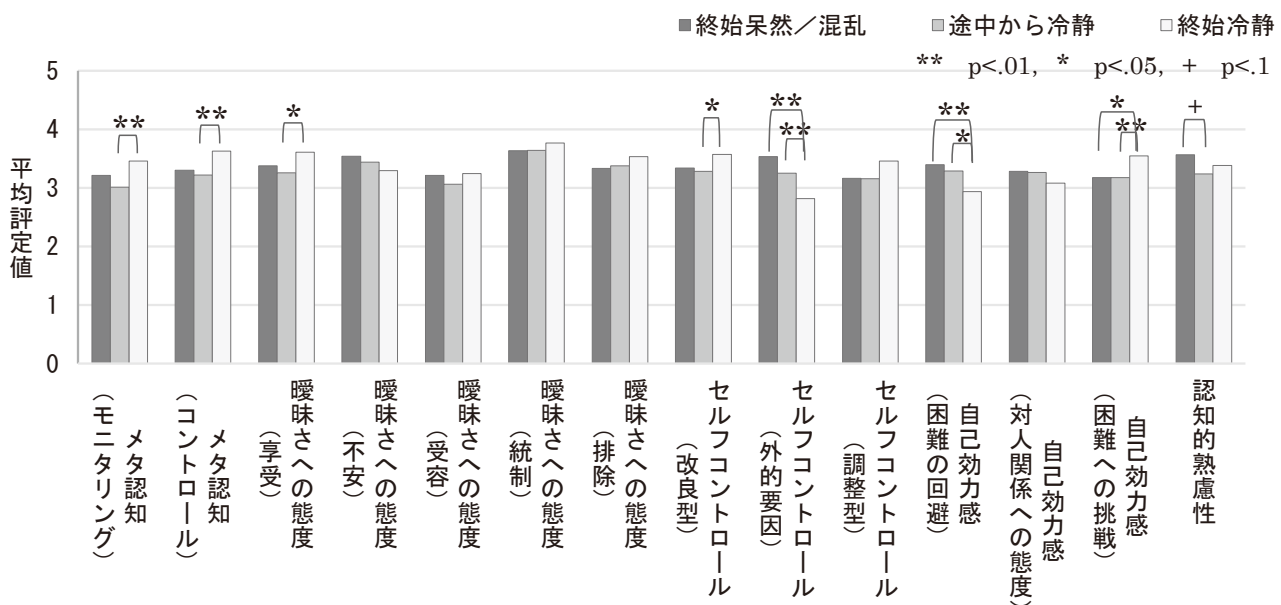


図3 対処時の情動的反応による個人特性の比較

これらの結果から、緊急事態に遭遇しても終始冷静でいた人は、途中から冷静になった人よりも、曖昧さや困難な課題に自発的に関与し、自分の思考や行動をモニターしながら適宜計画を修正し、他者への依存など消極的方略をとらない傾向にあるといえる。一方、終始呆然としたり混乱していた人は、終始冷静だった人に比べ、普段から困難な課題を避け、消極的な方略をとる傾向にあるといえる。

4.4 対処の結果と個人特性

4.4.1 対処の結果

事態に対処した結果について、5つの選択肢で評価を求めた。その結果、「①良い結果となった」43名、「②どちらかといえば良い結果となった」47名、「③どちらともいえない」29名、「④どちらかといえば悪い結果となった」3名、「⑤悪い結果となった」0名となった。

4.4.2 対処の結果と個人特性

対処の結果、良い結果となった①②を「良い結果」群 (n=90)、良い結果とならなかった③④を「良くない結果」群 (n=32) とし、両群間で各個人特性尺度の平均評定値を比較した(図4)。t検定の結果、メタ認知 (モニタリング, コントロール), 曖昧さへの態度 (排除), 自己効力感 (困難への挑戦)

において有意差 (順に, $t(120)=2.931, p<.01, d=.603$; $t(72.13)=2.886, p<.01, d=.520$; $t(120)=2.446, p<.05, d=.503$; $t(120)=2.410, p<.05, d=.496$), セルフコントロール (調整型; $t(120)=1.898, p<.1, d=.496$) において傾向差が認められた。

これらの結果から、最終的に良い結果となった人は、自分の思考や行動をモニターしながら適宜計画を修正し、曖昧さを排除し、困難に積極的に取り組む傾向があるといえる。

4.5 対処時の反応と対処の結果

対処時の情動的な反応と対処の結果との間の相関関係の有無を確認するために、 χ^2 検定を行ったところ、有意傾向を示した ($\chi^2(2)=4.847, p<.1, V=.199$)。残差分析の結果、終始呆然としたり混乱していた人は、良くない結果となる傾向にあった(表1)。

表1 対処時の反応と対処の結果

	良い結果	良くない結果	計
終始冷静	27	5	32
調整済み残差	1.6	-1.6	
途中から冷静	45	15	60
調整済み残差	.3	-.3	
終始混乱・呆然	18	12	30
調整済み残差	-2.0	2.0	
計	90	32	122

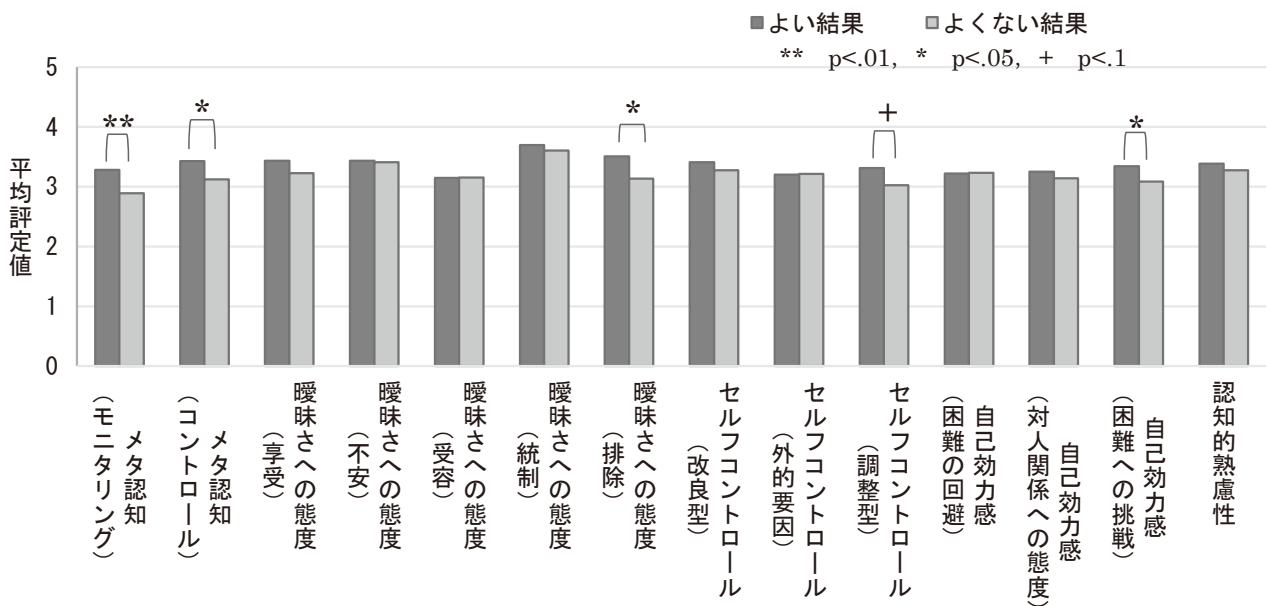


図4 対処の結果と個人特性

5. 考察

緊急事態に対して終始冷静であったと回答した群と途中から冷静になったと回答した群との間で、いくつかの個人特性に差が認められた。これらの個人特性から、本研究では緊急事態に遭遇した際に強い情動的反応が生じにくかった回答者の特徴は、曖昧さに積極的にかかわる（曖昧さへの態度（享受））、課題に対して消極的にならず、自発的な問題意識で良い方向へ変化させようとする（セルフコントロール（改良型、外的要因））、普段から、困難があっても回避したりあきらめたりせず、積極的に取り組めると感じている（自己効力感（困難からの回避、困難への挑戦）、自分の活動をモニタリングしながら柔軟に計画を変更する（メタ認知（モニタリング、コントロール）ことといえる。これらの多くは困難な課題や曖昧な状況に対して積極的に向き合うことを示す特性であり、日常的な行動や意識に対する評価であることを考えると、普段から困難に取り組む経験を重ねることで、セルフコントロールの方略を学習したり自己効力感が向上し、緊急事態に遭遇しても強い情動的反応が生じにくくなる可能性があるといえる。

このうちメタ認知の2側面と自己効力感（困難への挑戦）は、事態が良い結果となったと回答した群においても評定値が有意に高かった。メタ認知は緊急事態への対応中の自分の状況理解や資源配分を見直し調整する制御機構としての役割を果たしていることとされ、本研究の結果は、緊急事態への遭遇から対処が一段落するまでの過程全体において、制御機構が継続的に機能することの重要性を示すものと考えられる。他方、自己効力感は情動反応の生起との関係が指摘されており、緊急事態においても強い情動反応を抑えることによってメタ認知の機能を支えているのかもしれない。

一方、曖昧さへの態度（排除）は、対処の結果についてのみ有意差が認められた。不確実な状況下で意思決定し、実際に対処行動をとるためには、その時点での情報に基づき自分なりの想定を行い、具体的な行動の実行可能性について検討する必要がある。その過程では、曖昧さを排除し明確にできることは明確にしていくことも必要になると考えられる。

6. まとめ

質問紙によって収集した日常的な緊急事態への対応経験と個人特性の関係について検討した。結果から、困難な課題に対し積極的に関わろうとすること、メタ認知によるモニタリングとコントロールをうまく行えることが、緊急時対応では特に重要になると考えられた。本研究で用いた質問紙は日常における行動や考え方を問う質問文で構成されていることを考慮すると、普段から曖昧さや困難な課題に積極的にかかわることによって改良型セルフコントロールを学習し、自己効力が高まることにより、緊急事態においても強い情動反応が抑制され、メタ認知がうまく機能する可能性があるといえる。このことは、日常生活において曖昧な状況や困難な課題に積極的に取り組むことの有効性ととも、緊急時対応訓練などで、曖昧で困難な状況に直面し、積極的に解決に取り組む経験を重ねることの有効性も示唆する。特に、資源や条件の整った環境で手順を確認するために行う訓練ではなく、近年増えている、ストレスのかかる状況や使用できる資源に制約のあるブラインド方式の訓練（たとえば彦野他、2017;野々瀬他、2017）の反復が有効であると考えられる。

ただし、対処の成否については遭遇した事態そのものの特性や周辺環境や使用可能な資源などの影響を考慮する必要があり、個人特性に焦点を当てすぎることには注意が必要である。また、本研究の分析は単純な平均値の比較にとどまっているが、具体的な緊急事態の特性や実際の対処行動と個人特性の関係を、因果関係や相互作用も含めて明らかにし、それらの変容可能性や変容方法を検討していく必要があると考える。

引用文献

- 安倍北夫 (1988). 危機場面における人間行動 安倍北夫・三隅二不二・岡部慶三 (編) 自然災害の行動科学 (pp.10-25) 福村出版
- 阿部真美子・井田政則 (2010). 成人用メタ認知尺度の作成の試み - Metacognitive Awareness Inventory を用いて - 立正大学心理学研究年報創刊号, 23-34.
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.

- Bandura, A., Reese, L., & Adams, N.E. (1982) : Microanalysis of action and fear arousal as a function of differential levels of perceived self-efficacy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 5-21.
- Budner, S. (1962). Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality*, 30, 29-50.
- 彦野 賢・松井裕子・金山正樹 (2017). ノンテクニカルスキルに着目した緊急時対応訓練の開発 - (1)「たいかん訓練」の開発と試行 *INSS Journal*, 24, 32-41.
- 池田謙一 (1986). 緊急時の情報処理 東京大学出版会
- 岩男征樹(2001). 認知的熟慮性-衝動性尺度(滝間・坂元, 1991)堀 洋道(監修)心理測定尺度集I 人間の内面を探る<事故・個人内過程>(pp.195-198)サイエンス社
- Janis, I. L. (1954). Problems of theory in the analysis of stress behavior. *Journal of Social Issues*, 10, 12-24.
- 小木和孝・斎藤良夫・遠藤敏夫・橋本邦衛(1968). 二, 三の事例からみた緊急時の生理的反応 *産業医学*, 10, 381-386.
- 黒田 勲 (1986). 航空機における緊急状況下の人間の心理と行動 *社会心理学研究*, 1, 4-11.
- 釘原直樹・三隅二不二 (1984). 緊急恐怖状況下の迷路脱出に及ぼすリーダーシップ条件効果に関する実験的研究. *心理学研究*, 55, 214-220.
- 松井裕子 (2017). 緊急事態への対応と個人特性との関係-身近な緊急時対応経験に着目して- *日本心理学会第81回大会発表論文集*, 1013.
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤真一・長田由紀子 (1995). 特性的自己効力感尺度の検討-生涯発達の利用の可能性を探る- *教育心理学研究*, 43, 306-314.
- 西村佐彩子 (2007). 曖昧さへの態度の多次元構造の検討-曖昧性耐性との比較を通して *パーソナリティ研究*, 15, 183-194.
- 野々瀬晃平・渋谷尚夫・長坂彰彦 (2017). ノンテクニカルスキルを活かしたヒューマンパフォーマンスの向上 *電中研TOPICS*, 23, 11-14.
- 坂野雄二・東條光彦 (1986). 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み *行動療法研究*, 12, 73-82.
- 三宮真智子 (1996). 第7章 思考におけるメタ認知と注意 市川伸一(編) *認知心理学4 思考* 東京大学出版会
- Schank, R. C., & Abelson, R. P. (1977) . *Scripts, plans, goals and understanding: An inquiry into human knowledge structures*. Lawrence Erlbaum.
- 杉若弘子 (1995) .日常的なセルフコントロールの個人差評価に関する研究 *心理学研究*, 66, 169-175.
- 滝間一嘉・坂元 章 (1991). 認知的熟慮性-衝動性尺度の作成-信頼性と妥当性の検討 *日本グループダイナミクス学会第39回大会発表論文集*, 39-40.
- Thoresen, C. E. & Mahoney, M. J. (1974). *Behavioral self-control*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
(ソレセン, C. E.・マホーニィ, M. J. 上里一郎(監訳) (1978). *セルフコントロール* 福村出版).
- 上田真由子・和田一成・白井伸之介 (2013). 緊急事態における行動特性-より高難度課題の作業パフォーマンスについて- *人間工学*, 49 (特別号) 116-117.
- 横山秀史・永田 茂・山崎文雄・海老原学 (1992). 迷路実験による緊急時の人間行動特性. *土木学会論文集*, 441/I-18, 107-115.

付表 特性的自己効力感尺度の因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子
新しいことを始めようと決めても、出だしてつまづくとすぐにあきらめてしまう	.786	-.234	.029
すぐにあきらめてしまう	.779	-.163	-.211
何かを終える前にあきらめてしまう	.750	-.107	-.069
重要な目標を決めても、めったに成功しない	.696	-.110	-.171
思いがけない問題が起こった時、それをうまく処理できない	.681	-.107	-.044
難しそうなことは、新たに学ぼうとは思わない	.638	-.068	-.110
人生で起きる問題の多くは処理できるとは思えない	.615	.101	-.094
しなければならぬことがあっても、なかなかとりかからない	.487	.236	.103
非常にややこしく見えることには、手を出そうとは思わない	.440	.415	-.053
困難に出合うのを避ける	.349	.284	.136
私は自分から友達をつくるのがうまい	.233	-.987	.217
最初は友達になる気がしない人でも、すぐにあきらめないで友達になろうとする	.421	-.684	.187
新しい友達を作るのが苦手だ	.229	.677	.099
友達になりたい人でも、友達になるのが大変ならばすぐに止めてしまう	.202	.645	.190
人の集まりの中では、うまく振る舞えない	.406	.496	.048
何かしようとする時、自分にそれができるかどうか不安になる	.428	.452	.274
失敗すると一生懸命やろうと思う	-.010	-.168	.737
初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける	-.090	.095	.726
自分が立てた計画はうまくできる自信がある	-.158	-.232	.602
何かをしようと思ったら、すぐにとりかかる	-.141	-.173	.499
面白くないことをする時でも、それが終わるまでがんばる	-.069	.094	.496
人に頼らないほうだ	-.110	.200	.378
会いたい人を見かけたら、向こうから来るのを待たないでその人のところへ行く	.069	-.309	.332
因子間相関 第1因子	—	.454	-.086
第2因子	—	—	-.031
第3因子	—	—	—
累積寄与率			48.1